



# 娘のケア 母も毎日登校

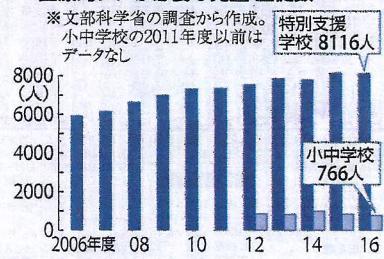
**医療的ケア児**たんの吸引や、胃ろうによる栄養注入、人工呼吸器の管理などの「医療的ケア」を日常的に必要とする子ども。新生児医療の発達で、重篤な病気を持って生

公立の特別支援学校に在籍する医療的ケア児は、2011年度に8116人で、10年前から約2200人増えた。国は13年度から、特別支援学校に看護師を配置する費用の補助を開始。この結果、06年度に707人だった看護師数は、16年度には1600人を超えた。昨年度からは、補助対象を公立の小中学校にも広げている。ただ、保護者の負担は大き

## 増える医療的ケア児

い。国が16年5月、特別支援学校に通う医療的ケア児について調べたところ、2割弱の保護者が登下校時と授業中に介護する家族の7割が、仕事に就けていないとする調査もある。介護する家族の負担を減らすには、看護師、教員、学校だけでなく、医師も含めて、高度なケアや緊急時にも対応できる体制を整えることが求められそうだ。

## ●公立の特別支援学校、小中学校に通う医療的ケアが必要な児童・生徒数



まれても救命できるケースが増え、増加傾向にある。厚生労働省の推計では、医療的ケアを必要とする19歳以下の子どもは2015年度に約1万7000人で、10年前の約1.8倍にのぼる。



▲自宅で娘のリナさん（左）と遊ぶ  
小関かおりさん（川崎市内）

介護・見守りのための時間的拘束	76.3%
保育所・幼稚園等、学校への通学時間等の介護	72.2
医療的ケアの実施	71.9
医療機関への通院時の介護	70.4
夜間の介護	68.2

厚生労働省の委託研究事業（2015年度）から。在宅で医療的ケアが必要な18歳未満の子どもを持つ保護者約1300人のうち「やや」も含めて、「負担感がある」と答えた人の割合（複数回答）

たんの吸引などを日常的に必要とする「医療的ケア児」が増えている。学校の看護師を増員するなど、国も支援策を打ち出しているが、通学や授業中の付き添いなど、保護者の負担は依然重い。（小沼聖実）

学校がある川崎市は、安全上の配慮から、教員によるケアを認めていない。夫は数年前から事故で寝たまゝに通うのは、大切ない。同年代の友達と過ごすことが、感情表現が豊かになつた」。川崎市の小関かおりさんは（48）は強調する。

次女のリナさん（11）は市立小学校の特別支援学級に通う5年生。管で栄養を送る胃ろうや気管切開をしており、定期的に胃ろうへの栄養注入やたんの吸引が不可欠だ。かおりさんは毎日、一緒に登校し、その後、午前8時半から午後3時まで校内の空き教室で待機。1日に数回、リナさんのケアを行っている。たんの吸引や胃ろうは、所定の研修を受けければ教員も行うことができるが、自治体の対

入を得たいが、付き添いがあつて難しい。かおりさんが勤めて収入を得たいが、付き添いがあつたが、自宅からは車を使つて20分ほど離れている。悩

## たん吸引、胃ろう 待機6時間半

んだが「放課後、街中で出会える距離に友達がいるような環境で子供を育てたい」と今的小学校を選んだという。かおりさんは今年6月、市立小中学校にも常勤看護師の配置を求める請願書を市議会に提出した。「もうすぐ中学生成。看護師がつけば、母子が離れて過ごす時間をたたせあげられる。柔軟な対応をしてほしい」

たたか、看護師のいる特別支援学校でも、「高度なケアへの対応が難しい」「看護師が足りない」などの理由で、親に付き添いを求めるケースも珍しくない。女児（6）を都内の特別支援学校でも、「高度なケアへの対応が難しい」「看護師が足りない」などの理由で、親に付き添いを求めるケースも珍しくない。女児が学校に通ったのは、入学後3か月で20日ほど。「なんとか対応してもらえないものか」と

## 親の付き添い

親の付添いをする医療的ケア児は「おまかせん」と言われたという。あれば、看護師も人工呼吸器の管理を行えるが、「うつでは、看護師によるケアはできるません」と言われたという。母親は病気がちで、体調を崩した日には付き添いができる。このため、女児が学校に通えたのは、入学後3か月で20日ほど。「なんとか対応してもらえないものか」と

め息をつく。の一人だ。子どもは気管切開し、人工呼吸器をつけている。ケアに関する医師の指示書があれば、看護師も人工呼吸器の管理を行えるが、「うつでは、看護師によるケアはできません」と言われたという。母親は病気がちで、体調を崩した日には付き添いができる。このため、女児が学校に通えたのは、入学後3か月で20日ほど。「なんとか対応してもらえないものか」と